

感性教育は人間教育に通じる —臨床教育についてつれづれに思うこと—

西南学院大学人間科学研究科臨床心理学専攻 小林隆児

とうとう定年退職を迎える歳になった。本学に着任してからも早や8年近く過ごしたことになる。最近になって特に臨床教育についていろいろと思うことが多くなった。これまで精神医療、障碍教育、社会福祉、心理臨床と、一貫して対人援助を生業とする臨床家養成の教育に従事してきた。ところが本学に来てから、学部教育で一般企業に就職する、臨床家を目指さない学生たちと触れ合う機会がとみに増えた。当初は臨床家養成を本分としてきた者としてどこか物足りない一抹の寂しさを禁じ得なかったが、学部の学生相手に「感性教育」を積み重ねるうちに、そうした思いは次第に消え失せ、それに代わってこれまで経験したことの無い充足感を味わうようになった。

それが何かを述べる前に、私が感性教育を思い立った経緯を簡単に振り返ってみよう。

*

自閉症をはじめとする発達障碍の子どもたちを乳幼児期早期から母子の関係の相で観察する中で、私は独特な関係病理を見出し、それを「あまのじゃく」と称した(小林、2015)。それは「甘え」という情動のアンビヴァレントな動きを示すものだが、1歳台ではそれから生まれる不安と緊張が比較的明瞭なかたちで行動となって表に現れる。しかし、2歳台以降になると、途端

に不安への対処行動が前景化し、不安と緊張は背景化することがわかった。さらに、多様な対処行動が固定化したものが従来指摘されてきた症状であることもわかった。それは、当初の不安と緊張が心理的防衛の働きによって無意識の層に潜在化し、それに代わって症状が前景化するということを意味する。

さらに興味深いことに、潜在化した不安の源となっている情動の動きとしてのアンビヴァレンスは、われわれの目から雲隠れして、全く捉えることができない、と思われがちだが、じつはそうではない。ほんの些細なからだの動きにそれを覗き見ることができる。アンビヴァレンスという情動の動きはからだの動きとして捉えることができるからである。それを肌で感じ取ることができるようになることが臨床家に求められるが、そこでの理解のありようは、自らの身体(情動)を介した理解であって、単なる頭でわかるのとは質的に全く異なる、いわば「腑に落ちる」体験理解である。

常々私は関係ないしコミュニケーションを二重の相で捉える中で種々の関係病理を考えてきた。当初は情動的/象徴的水準と称し、今では感性的/理性的水準と呼ぶことが多いが、先のアンビヴァレンスという情動の動きはこの感性的コミュニケーションの相で比較的容易に誰でもその気になれば、捉えることができる。ただし、そのた

めには理性に過度に頼るのではなく、感性に身を委ねる姿勢が求められる。そこで私は感性教育を思い立ったのである（小林、2017a；小林、2017b；小林、2018a）。

*

感性教育で私が試みている方法自体はいたってシンプルである。新奇場面法で観察された乳幼児と母親の交流場面の記録ビデオを供覧し、学生たちは各々感じ考えたことを自由に語り合い、進行役の私は学生たちのそれぞれの思いをより明確にしていくことに心を砕く。その際、重要なことは彼らのちょっとしたからだの動きやつぶやきに覗かせているところの動きを見逃さないことである。それに気づくことによって、彼らは自分が何に着目してどのように感じたか、自ずとそこに目を向けるようになる。その結果としての自己理解が他者理解の深化へと繋がっていく。クライアントにとっての根源的不安であるアンビヴァレンスを臨床家が面接で捉え治療的に扱うためには、自身の内面にも内在するアンビヴァレンスへの気づきが求められるという私の主張はそのような理由に依っている。

*

本学に着任してから機会あるごとに、学部生（小林、2018b；小林、印刷中b；小林、印刷中c）から社会人まで感性教育を試みているが、日増しに強くなってきたのが、今日の専門教育を学べば学ぶほど感性は摩耗するのではないかとの危惧である。そこで私は学部生、それも受験教育を終えたばかりの1年次から積極的に感性教育を取り入れるようになった。専門知識を学ぶことによって彼らに先入観が植えつけられるのを極力避けたいとの思いからである。

もちろん私は今日行われている専門教育

そのものを全面的に否定しているわけではない。専門教育を学ぶ前段階で、まずは人間観察力を養うための基礎教育として、生身の人間と触れ合う、あるいはそれに近い体験を味わうことで、人間を理解することとはどんなことかを体感する必要があると考えているからである。なぜならあまりにも頭でっかちで理性偏重の教育が横行していると日々感じているからである。

今では懇切丁寧な教育が大流行りで、分かり易さを売り物にするきらいが強い。最近、私は拙著『臨床家の感性を磨く』（誠信書房）に対するある書評（廣瀬、2018）を読んで強く思ったことであるが（小林、印刷中a）、学生に人間を観察し理解するという営みがどの様なものを体感してもらうためには、あらかじめいかに観察するか、ガイドラインめいたもので枠組みを教示することがあってはならない。それは彼らに先入観を与えることになるからである。そうでは無く、人間を観察し理解するという営みが、いかに人によって異なるかをまずは実感する。そしてなぜ自分は人と違ってこのように感じ理解したのかを考える。その違いが専門知識の寡多ではなく、自らの過去の体験に大きく依拠していることを実感してもらいたいと願うからである。つまりは人間を観察する上で、まずは自分とはどんな存在かに思いを寄せることが大切だと考えているのである。

*

入学直後の新入生に感性教育を試みると（小林、2019；小林、印刷中c）、学生たちの多くが従来の講義との違いを異口同音に語り、これまで味わったことのない面白さと充実感を体験していることがわかった。その中でも印象深かった学生たちの体

験談を以下いくつか紹介しよう。冒頭のタイトルは彼らが考案してつけたものである。傍点はすべて筆者による。最初に紹介するのは、自分の無意識に気づいた喜びを語る学生である。

「無意識を意識する」

学部1年 女性

この授業を通して一番自分で以前とは変わったと思うのは、「無意識を意識できるように心がけるようになった」というところです。無意識を意識してしまえばそれはもう無意識とは言わないのかもしれませんが、自分が普段見えていなかったような考えに自分自身で気づけるようになることの面白さを感じられるようになりました。物事を観察することにおいて、自分が無意識のうちに気づきたくないものについて避けていたり、逆にどうしても意識してしまってそればかりが気になってしまう部分があることに気づけたし、まだまだ自分の知らないところにそのような部分があるのだらうと思えるようになりました。また、自分は人の意見に影響されやすいところや、自分の中で自分の意見に反論しながら延々と考え込んでしまい、はっきりとした意見が言えなかったり、判断が遅くなってしまうところがあります。でもそれは決して悪いことではなく、そうすることで自分の中の無意識を探り、より深く自分らしい考えに至れるのだということを学びました。

「自分が普段見えていなかったような考えに自分自身で気づけるようになることの面白さ」を実感するとともに、これまでの自分を振り返って、「人の意見に影響されやすいところや、自分の中で自分の意見に

反論しながら延々と考え込んでしまい、はっきりとした意見が言えなかったり、判断が遅くなってしまうところ」に気づいている。つまり、自分の中の相矛盾したところに目を向けるようになっていく。そしてこの学生の素晴らしいところは、そんな自分を単に否定的に捉えるのではなく、そこから自分の無意識を探ることによって、より深い考えを生み出そうとしている。

私はこの学生の体験談を読んで、驚きと感動を禁じえなかった。なぜなら私が日頃患者との面接で治療目標に置いているのは、患者のこの種の気づきであったからである。大勢の学生相手にわずか半年間（実質3～4ヶ月間）15コマの講義でも、学生によってはこのような深い自己理解にまで到達するということがあった。

*

ついで紹介するのは、深い自己洞察によって自分自身の考えに自信を持てる感覚を知った学生である。

「きっかけ」

学部1年 女性

この講義を受けたことは、自分自身を見つめなおす良い機会となった。

私は今まで、小学校、中学校、高校と答えがあらかじめ用意された問題を数多く解いてきた。それまでは気づけなかったが、いつの間にか答えを導き出す癖を身に付けていた。おそらく私の周りの人たちも同じだろう。しかし、大学生となり、社会福祉を学ぶようになってからは、答えを用意されていない問題を提示されることがほとんどになった。私自身、答えを導き出すことしかしてこなかったため、考えることがとても難しく、苦手だった数学の難しい問題

を解くことよりも難しかった。そして、私は今まで一つの答えを導き出すことしかしてこなかったんだと思い知らされた。今まで私は学力的にみると、一般的に言われる頭の良い部類だと思っていた。しかし、答えがない問題に対しては周りの人たちよりも弱いことがわかった。それは、自分の今までの生育歴に関係するのではないかと考える。

私は人よりも努力しないと人並みに勉強することが出来ない子どもだった。それは今でも変わらない。私は小学校の頃からいわゆる「真面目な子」であった。宿題もちゃんとし、忘れ物もしない、先生から怒られることもない、友達とも仲良く遊ぶ子だった。外では人見知りする子どもだった。しかし、家に帰ると末っ子という立場もあったため、お母さんが大好きな子であった。年の離れた兄と姉がおり、かなりの甘えん坊であった。当時は分からなかったが、私は何でも家族に「なんで？なんで？」と聞く子どもであったそうだ。親や兄たちは「自分で調べなさい」と言っていたそうだが、それでも私は何度も「なんで？なんで？」と事あるごとに言っていたそうだ。このことが考えることが苦手になった原因であると考え。

甘えん坊であるがゆえに、考えることにも誰かに甘えていた。「自分が聞けば、誰かが教えてくれる」と無意識に思っていたのだろう。それが残ったまま成長していった私は、小学校、中学校、高校と、分からない問題、少し考えても分からない問題は「自分の力で解く」ことはせずに、すぐに友達や先生に質問していた。当時の私は「分からない問題はいつまで経ってもわからないんだから、誰かに聞いて解決した方

がいい」と考えていた。

しかし、今になって、この講義を受けて、感じたことがある。私の兄は福岡市で一番偏差値の高い高校に進学し、部活をしながらも現役で九州大学に進学し、世間と言われる「いいところ」に就職した。そのような結果になったのは、兄の努力の成果であると思う。そして、兄は自分で考えるということが無意識のうちにしていたからだとも思う。

その理由は兄の学生時代に遡る。兄は私と同じで「真面目な子」であった。努力を惜しまない子だった。しかし、私とは違い「親に甘える」ということをあまりしない子どもだったと母は言う。兄は長男で、下には年の離れた妹二人いる。そして、中学生になるまで転校を数多くしてきた。兄は辛い思いを沢山してきた。そのこともあり、兄はとても強い子どもになったそうだ。また、私は中学生の時も高校生の時も親から勧められた学校に合格することを目標に頑張ってきた。しかし、兄は親に相談することなく、受験校を前もって自分自身で決め、宣言通りその学校に合格した。就職のときも同じだった。私は兄と全く異なる道を生きてきた。つまり、自分で考えることなく成長してしまった。

この講義を受けるまでこのことに全く気づかされなかった。私はこの講義を受け、考えることに対して頭を使うことで自分を見つめ直すきっかけになった。自分の考えをまとめ、先生や他のクラスメイトの考えを聞き、また考え直すことで私が今までしてこなかった「考える」ということに頭を使うことが出来たからだ。今までは自分の考えをまとめることや述べることがとても苦手だった。しかし、この授業を受けたこ

とで、他の授業の中でも自分なりの考えを持ちながら講義に臨めることが多くなったように感じる。

初めこの授業は自分にとって訳の分からない授業であった。自分の考えたことに自信が持てず、答えを提示されずに毎回の授業が終わる。しかし、何回か授業を受け、親子の動画を観察し、先生の解説を聞いてみると、先生の考えを含めた私自身の新たな考えが出てきた時があった。その時に、「これが自分自身の考え、答えなのだ」となんとなく感じる事が出来た。今でもまだ自分自身の答えや考えに自信が持てないときが数多くある。しかし、自分自身の考えに自信が持てる感覚を知った今は、「諦めずに考えることの重要性」に気づけたため、あなたの考えを述べなさい、という問いを与えられた時には中途半端ではなく、自信が持てるような答えを述べるようにすることをとても心がけるようになった。私はこの授業を受けて、社会福祉士になるための力を身につけられたとは感じなかったが、自分自身を見つめなおすとても良いきっかけになった。

これまで自分の中に、いかに正解を導き出すことばかり考えてきたか、そうしたとらわれに気づいている。この講義が自分自身を見つめ直す機会となったからだという。自分が子ども時代にどんな子どもだったかを振り返るなかで、いかに周りの期待に応えることを良しとして生きてきたかに気づいている。そして「先生の考えを含めた私自身の新たな考えが出てきた時があり」、そこで「これが自分自身の考え、答えなのだ」との感触を味わい、そこで「自分自身の考えに自信が持てる感覚を知っ

た」という。文字通り「主体的・対話的で深い学び」を体験したのではなかろうか。

*

次いで紹介するのは、自分の先入観に気づき、感受性が豊かになり、新たな気づきの喜びを語る学生である。

「新たな発見に出会えた授業」

大学1年 女性

この講義で、私はあらゆる視点に着目する力を身につけることができたと思う。他の授業とは違い、ビデオを視聴し、自らの意見を感じたままに自由に感想を書くことが主な授業であった。また、その書いた意見を共有し、多くの視点から物事を考えた。

最初のビデオの視聴の時は、普通の子どもにしか見えず、「間違っている行動はない」と思ったことばかり目につき、注意深く観察することができていなかった。親子関係の距離感にも全く気づくことができなかった。子どもがボールや遊具で遊んでいるのを母親は見守っている映像だと思った。ストレンジャーが部屋に入ってくると、子どもは人見知りをするかのようにじっと顔を見つけるのもいたって普通の行動だと思っていた。しかし、先生の解説を聞くと、親子関係のあらゆるところに距離感があることがわかった。また、子どもばかりに目を向け、母親の行動までは感じ取ることができていなかった。全体的に目を向けるのではなく、一つの点ばかりにとらわれていた。しかし、先生の解説や授業回数が増えていくうちに新たに気づくことが増えていった。先生が、子どもの仕草や行動、表情をわかりやすく映像とともに解説した後に、もう一度ビデオを視聴すると

「なるほどな」「確かにそうだな」と感じる部分が多くなった。

例えば、子どもの遊んでいる姿をビデオで視聴した。その際、子どもはずっと一人で遊び、母親と一緒に遊ぼうとして子どもに近寄っても、一緒に遊ぼうとしていなかった。子どもは素っ気なく無視するような態度であったことを鮮明に覚えている。このような態度を最初は、気づくことなく目にも止まらなかった。

また、母親が子どもを抱っこした時の解説も心に残っている。子どもは、抱っこをされている時も母親とは目を合わすのを避けている。抱っこをされても指をくわえ落ち着いていないことから、このような行動をとるなどの解説を聞いたときに、そのような考えもあるのだと思った。子どもにとって、指をくわえるのは癖だと思っていたが、答えは違っていた。次に先生は母親に視点を置いた。私は子どもにばかり目を向けていたため、「普通の母親だな」としか感じていなかった。しかし、解説は予想もしなかったものだった。先生は「母親が子どもを避けている行動が見られる」と解説した。このような行動が母親から読み取れるのだと驚いた。私は、細かいところまで目を向けていないことに気が付いた。また先生は、親子関係には関係ないストレンジャーに注目していた。授業回数が増えるとともに、自分で細かいところまで気がつくようになり、新しい発想を生み出すことができるようになった。子どもだけではなく、母親やストレンジャーの心情にも考察できるようになった。そのため、授業に対する楽しみや喜びも増していった。

この講義は、他の講義とは違い、感受性を豊かにする授業だと思う。大学の講義と

いえば、今まで習ったことを生かし、新たなことを身につけるものだと思っていた。しかし、それだけでは新しい何かを発見することは不可能だと知ることができた。他の講義では身につけることのできない感受性を養うことができたと思う。まだ考える上で、いつもとは違う考え方をすることも大切だ。そうすることで、新たな発見を生み出すことができるのだと感じた。他の人の意見も聞き入れることで、次の授業の視点をおく場所も増えていき、色々な点に着目することができるようになった。最初のビデオを視聴した時よりも、気がつく点が増えていった。一つの点にとらわれず、全体的に目を向けることができるようになった。また、自分の足りない力を知ることができた。それは物事を考える柔軟性が欠けていることだ。この講義を受講したことで、私は物事を考える際に先入観にとらわれ過ぎていたことに気づくことができた。これからソーシャルワークに携わる上でこのように考える機会は多くあると考える。その際、一人の人に注目するのではなく、全体的に着目し、観察するべきだと思う。子どもや母親、ストレンジャーの心情や行動を注意深く見る必要があると感じた。自分の意見も尊重しつつ、他人の意見も聞き入れることで見方が変わり、新しい考え方が生まれることを学べた。関係性も深く知ることができた。自分の感受性や注意力の向上につながる良い授業となった。これから他の授業で、このような映像を見ての自分の感想を述べる機会があるかもしれない。その時に、今回の経験と知識を生かして、多くの発想力を卒業するまでに身につけることが大きな自信に繋がると考える。

この講義は、自分自身に役立つことが多

くあった。これから結婚し、子どもを持つことになるかもしれない。その際、子どもの行動が「おかしいな」「変だな」と気づける行動を知ることができた。また、子どもとのコミュニケーションのとりかたを学んだ。この学んだことは将来役に立つと思う。

人間観察の難しさを経験するなかで、次第に細かな点について気づくことができるようになり、それが自分の新たな発想につながることを実感し、それが喜びとなっていることが率直に述べられ、「自分の感受性や注意力の向上につながる良い授業」との評価がなされている。感性教育の醍醐味とも言える内容である。

*

最後に紹介するのは、1年生ではないが、同じ講義に出席していた学部2年生の体験談である。

「眼の養成」

学部2年 男性

この講義を受けて、ビデオの実情が衝撃的だと感じた。と同時に、よく観察する力、つまり「眼と心」を養うものと私は思った。ここで体験したことは、自分にとって物事を多角的に捉えることの難しさ、人を見るためには、行動・状態・心的変化・しぐさ、時によっては、この瞬間は、このような心理だというような推測力が求められ、他の講義ではまず体験できないような貴重な時間だった。

言葉を持たない子どもとその母親の間に生ずる見えない壁、そしてその原因となっているファクター（要因）の解明、紐解くことは素人である私には非常に難しく、困

難なことだと思っていた。

小林先生の講義を受講するのは、今まででも何度かあったが、改めてこの講義の特徴は？何を学び考えることができたのか？と考えると、ビデオ・資料を通して自然に物事に対する見方と感じ方、感性が研ぎ澄まされていったように思える。

人によってももの見方、観察の仕方や捉え方は十人十色で、もっと言うならば、言葉を持たない子どもとその親の交流場面をどのように把握するかは非常に難しく、様々な考えがあると思う。そして、その人その人の心理の奥底には、自分が自覚していない無意識的な「もの」があると感じた。それは自分の生い立ちや今までの環境に起因するのかもしれないと感じた。他の講義では、あまり口にしたくないが、生徒の受動的な講義がほとんどだ。教授からのテキストやレジュメ、授業そのものが教授から生徒への一方的な講義で、それは形だけの「講義」なのだと思う。ましてや、生徒自身が能動的に考え、自分の気持ちや見方を体現することなどできてはいない。

しかし、この講義は生徒に考えさせるため、最初は何も指示や教えたりなどはしない。1回目ビデオを鑑賞した際に、私自身の感性と眼でこう感じたことがあるとする。そして、気づきが深まるように、先生や周りの着眼点などに着目して、2回目のビデオを見た際に、1回目よりもはるかにそのビデオの本質が見て取れると感じた。この時の気づきの気持ちよさ、そして面白さは他の講義ではなかなか味わえないものである。

過去のビデオでつぎのようなものが印象に残っている。1歳0ヶ月男児の主訴で、泣いてばかりであやしても笑わない。抱き

つくとのけぞる。視線が合わない。人見知り
が激しく人を寄せつかない。真似を全く
しない。人見知りが激しく、周囲への警戒
心が激しい。こういった症状の子である。
初回面接では、母親はこの子を赤ちゃんら
しく感じたことがないと語っているのが印
象的であった。

ビデオは2回見たが、1回目と2回目見
たとき、同じものを見たはずなのに、自分
が見落としていたものが多く見られ、まる
で違うものを見ている気分だった。たしか
に一度見たものだから、どういう内容かの
アウトラインがあり、固定観念から抜け出
すことがなかなか難しかった。しかし、
上記に挙げたように、小林先生のヒントで
着眼点を変えること、つまり私は一度目は
子ども視点で見ていたものを、二度目は母
親視点で着目したところ、「気づき」に気
づいたのである。

母親は、子どもに対して自分の理想と現
実のギャップがあり、それを埋めたいがた
めに、無理をしているような印象だった。
ストレンジャーが入室した時も、虚勢や見
栄を張るため、露骨に子どもをなでたり、
あいさつさせようとしたところは痛々しく
思えた。ただの気持ちがこもってない行動
にしか見えなかったからだ。つまり、母親
は周囲の目が気になっている。それが子ど
もとのすれ違いを生んでいる要因の一つで
はないかと思った。

このようにして、見方を変えるだけで考
え方が変わり、知らなかったものが見えて
くる。物事を多角的にとらえ、その中に
いる人と自分をシンクロ・リンクさせるこ
とにより、心理的にその人の立場になるこ
とで、「こころ」というものがわかるのでは
ないだろうか。当たり前のように聞こえる

が、実際これはなかなかできるものではな
いと思う。これも「気づき」の一つであ
り、この講義における重要な学びである。

1度目のビデオで自分の気づきにとらわ
れるのではなく、固定観念から抜け出すた
め、着眼点を違うものに置き換えていくこ
とが、1度目と2度目の気づきの差異だと思
った。

他の講義にも言えることだが、小林先生
の講義はビデオを用いる際、必ず1回流す
だけでは終わらない。それは小林先生の明
確な意図として伝わる。ただ、教えるだけ
ではない。問題の本質を直に見て欲しいか
ら、そして、気づいて欲しいから何回も流
し、心と眼の養成を鍛えて促しているのだ
と思う。実際、講義の初めの方と終わり
の方では、着眼点やディテールに対する見
方が恐ろしく変化してきたように見え、
それは初回とは雲泥の差であると思った。

最後になるが、このような成長するき
っかけを与えてくださった講義に、そして
小林先生に感謝の気持ちが尽きないと感じ
ている。

着眼点を変えるだけで人間観察の理解が
大きく変化していくことを実感する中で、
その際の気づきの心地よさと面白さを語
っている。さらに、「観察対象と自分をシン
クロ・リンクさせる（重ね合わせる）こ
とで、その人のこころを理解することが可能
になる」ということを述べている。この指
摘は、人が人を理解する際の本質を言い当
てていて、素晴らしい気づきである。そし
て、それを阻害する要因として先入観にと
らわれることを挙げている。感性教育のね
らいが的確に届いていることが文章全体か
ら伝わってくる。

*

以上、主に入学間もない学生たちの反応を取り上げたが、その他にも学部生相手に少人数でのゼミを行なっている。一昨年度から昨年度にかけて、初めての試みとして3年次の後期から1年半という長期間にわたって感性教育を実施した（小林、印刷中b）。7名という少人数で文字通りの対話形式で、多くの母子事例を供覧し、学生たちとの対話を積み重ねてきた。修了時に語った学生たちの体験談は、感性教育のねらいが確実に学生たちに届いていることを実感させるものであった。いくつか紹介しよう。

「自分の中で変わったこと」

学部4年 女性

このゼミに入ってから、約1年半経ちましたが、数多くのビデオを観て、皆と話し合うことを、本当にたくさん行いました。おかげさまで、最初の頃よりも、観察力や発言力が身に付いたと思います。その中で、私は特に、他人に自分の考えを伝えることが、このゼミに入る前よりもできるようになったと感じました。

このゼミでは、必ず自分の意見や気付いたこと等を皆に発言する機会があります。自分の声が小さかったり、言っている意味がよく分からなかったりすると、先生はそれをすぐに言葉にするので、注意される前に、皆に伝わるように、聞き取れる音量で、分かりやすく、しかし、簡潔に言葉をまとめて発言することを心がけるようになりました。また、自分の意見を毎回必ず発言するので、「自分の意見」を言うことに躊躇しなくなりました。

以前の私は誰かに「自分の意見」を言う

ことにとっても怯えていました。友人でも、家族でも、部活の仲間でも、自分が言いたいことは心の中に押し込めて、いつも相手に合わせていたことが多かったのです。これは私の家庭環境等も関係しているのですが、とにかく、相手に迷惑をかけることや、相手を怒らせること等に怯えていたので、いつも相手の顔色や機嫌をうかがっていたように思います。だから、相手の意見に合わせて会話を進めることが多かったのです。そのせいか、「昔からの友達」というのが少なく、薄っぺらな交友関係ばかり築いていたのだなと思いました。

しかし、ゼミで自分の意見を言う機会が増えて、私の意見に反対したり、理解できない、と言われたりしたこともありました。私がなぜそのように考えたのかを説明すると、「理解はできないが納得はした」といったことがありました。そのときに、自分の全てを肯定されることが「受け入れられる」ことではないのだ、と改めて気付いたような気がしました。つまり、相手に合わせて全てイエスマンでいることが本当の友人関係ではないのだと思いました。それから少しずつ、薄い友人からの頼み事を、自分が厳しかったら断るようになり、逆に私から何か頼むようなことをしたりするようになりました。その結果、関係が切れてしまった友人もいますが、私自身はとてもしっきりしました。これから社会人になる前に、「自分の意見を相手に伝える」という一見当たり前のことに気付いて、本当に良かったです。（以下略）

自分の育ちを振り返りながら、自分自身の対人関係のあり方について率直に内省しながら、自分の気持ちに正直になることの

大切さを体験していることが語られている。

*

「矛盾の塊」

学部4年 女性

このゼミでこれまでたくさんの親子のビデオを見てきて、特に自分が日常生活で具体的に何かが変わったことはない。それでも今まで自分が人間に対して抱いていた考えはおかしくないと思うようになった。人間は矛盾の塊ではないかと私は思う。自分の感情しかわからないので、今まではもしかしたらおかしいのは自分だけではないかと、矛盾だらけの自分に不安がありました。でも授業で、幼い子どもでも母親に対して矛盾した感情を行動で表しているのを見たり、母親が子どもの相談に来ているにも関わらず、無意識に良く見せようとしてしまうのを見て、誰でも人には矛盾していることはよくあるのだと思った。

しかし、ビデオの子どもたちのように、その矛盾した気持ちをあまりにも早く引き出される体験をしてしまうと、のちのち悪い影響をもたらすことがある。子どもが母親に対して、一緒にしてほしい気持ちがあるのに、自分のしたいことを抑えて母親の言う通りにしたり、それを諦めて自分ひとりで遊ぶようにしているのを見ると、このまま大人になれば、きっといつか今まで抑圧して来たものが爆発して、おかしくなったり、自分を見失ってしまいそうだと思う。

また、誰でも相反する気持ちを持つ時があることを知った今では、他の人に対して少し考え方に余裕ができたような気がする。これまで私には人と接するときいつも相手にどう思われているのかが気になって

仕方がなく、悪い方向に予想して勝手に落ち込む癖があったが、今は相手から本音かどうかわかりづらいことを言われても、「本人も自分の気持ちをよくわからないかもしれない」、あるいは「嫌と思っている一方で他の気持ちもあるかも」などと思うようになった。そう考えると、あまり相手が自分のことをどう思うのかを気にならなくなった。

・・・(中略)・・・

私は入学前には心理学科を目指していたくらい人間の心に興味を持っていた。結局、社会福祉学科に来たが、今までの授業でも支援が必要な人の気持ちを考えるような授業があり、それはそれで面白かったが、実際にすぐそこにいる人に気持ちを、その人の口から聞けることなど滅多になく、このゼミに来るたびに、人の感情、考え方を自分で体感できて、とても勉強になり、人間への興味がさらに深まった。ゼミの中での先生の何気ない質問に、意外と深く考えさせられたり、自分を振り返らせられたり、なんで自分はこう思うんだろうかと、自分の気持ちに気づかされることがよくあった。そのようなことができるようになるためには、どれほどの人を見ないといけないのだろうと思った。ゼミを受けて人の心に対する興味は減るところか、ますます強まった。

自分の中の自己矛盾に苦しんでいた彼女が、多くの事例を観察するなかで、母子関係に具現化している様々な矛盾したところの動きとしてのアンビヴァレンスを直に感じ取るなかで、人間誰にでも息づいていることを実感し、自分のなかの自己矛盾にしっかりと向き合い、肯定的に捉えることが

できるようになっている。これほどの自己理解が学部生に認められたことは感性教育の可能性を考えると、とても喜ばしいことである。

*

「見えるもの、見えないもの、されど感じるもの」

学部4年 男性

今回や今回の事例に限らず「見えるもの・見えないもの・されど感じるもの」はたくさんあると感じている。

ゼミが始まって早いものでもう1年半が経とうとしている。その中で実に多くの母子の様子を観察してきた。それぞれの親子の特徴は様々で、その中に渦巻く感情も実に様々で、日常に当たり前のように存在するテレビドラマよりも壮絶でなおかつ面白く、時に悲しく感じた。

そう感じる中で、まず「見えるもの」。これは母親、子供の行動はもちろんだが、その行動の中の細かな表情だ。

次に「見えないもの」。それは「見えるもの」の中で見えた行動や表情の中に存在する様々な「感情」ではないか。その「感情」は実に複雑である。

「甘えたいが甘えられない」という、相反する感情・母親が自分のことをわかってくれないことに対する怒りや悲しみ、戸惑い。また母親の子供に対する「なぜ自分の子供がこうなのか」という苦悩や戸惑い。

「見えるもの」の中にはこうした様々な感情が渦巻いている。これらはすべて「見えないもの」である。確かに表情としては「見える」かもしれない。だが、根底の部分に関しては決して「見えない」また「見ることが出来ない」ものではないだろうか。なぜなら我々支援者や観察者はその

「ドラマ」の主人公ではないからだ。私たちはあくまで母子という二人の主人公の行動や表情を感じ取り、理解し、より良い方向へと導くための脇役でしかない。その脇役たる役目を十二分に果たすために大切なことが「感じるもの」を「確かに感じること」ではないか。

この1年半、様々な事例を観察してきた。最初は皆ありきたりな答えしか出てこなかった。全てを「甘えたくても甘えられない」、この言葉で片づけていた。しかし、時間を重ねるごとに「感じられる」ようになった。今ではしっかりと子供や母親の言葉や表情、行動を細かく分析し、その意図をくみ取り、何パターンもの自分たちなりの解答を導き出している。私自身もそうだ。「甘えたくても甘えられない」の一言では終わらせず、自分自身の過去と向き合い、照らし合わせ、子供の感情や母親の感情を推測することが出来るようになった。それをすることによって私自身の人や物ごとに対する感じ方・考え方が変化するようにになった。

これまでは「このような親であれば子供がこうなっても仕方がない」と安易に考えていた。しかし、これは自分の力でどうすることも出来ない幼いうちだからこそ許される感情なのだと気づくことが出来た。なぜなら、私は「今の自分ならどのようにこのような状況を自らの力で変えられるだろうか」という視点も加えて観察をしているからだ。

「自分の家庭もこのような感じだったな」と感じるような事例もたくさんあった。以前はそんな事例を見て「じゃあ今の自分がこうなのも仕方がない」、このように考え、周りのせいにして、自分が変わる

ことから逃げていた。そんな家庭環境を思い返し、両親に対し、怒り・憎しみ、それに似た感情を抱くこともあった。

しかし、今は違う。支援者の立場に立つて考えることで、「自ら（の力）で自らを助ける・支援する」ように変化していった。確かに、私自身が生まれ育った環境、小・中学校と虐められ、暴力が当たり前だった世界で生きてきた環境、これは変わることはないし、変えることは決してできない。そんな環境が自分自身を創って来たのも事実だろう。しかし、このゼミを通して、他人を観察することを通して、「自分自身に置き換えて自分自身を助ける」、そんな術を身に着けることができた。それは「見えるもの、見えないもの、されど感じるもの」をしっかりと見極めることが出来るようになったからだろう。他人のことが理解できるようになると、自分自身のことでも理解できるようになり、客観的に自分自身を見つめ、自分自身をも助けられるようになった。そこがこのゼミを通して人間的に大きく成長した部分ではないだろうか。

・・・（中略）・・・

このゼミでは否応なしに議論を重ねる。最初は「なんでその考えなん、意味がわからん」、こんな風に思っていた。しかし、回数を重ね、事例の難易度が上がるにつれ、その考え方が通用しなくなった。みんなの意見を聞かないと、より良い支援策や感じ方が出来なくなった。ここで初めて「肯定することの大切さ」を学ぶことが出来た。そこから自分自身の事例に対する見方はもちろん、人との接し方が変わったと思う。ここまで自分自身を成長するきっかけをくれたこのメンバーに心から感謝している。そしてそんな機会を与えて下さった

先生にも心から感謝の気持ちを伝えたい。ありがとうございました。

この学生の体験談の内容は実に深い。人間理解においていかに「感じ取る」ことが大切か、身を以て体験し、それをじつにわかりやすいことばで具体的に語っている。

さらに驚かされるのは、自分自身の親子関係を振り返りながら、これまでの自分と感性教育を通して変化した自分を、「自分自身の過去と向き合い、照らし合わせ、子供の感情や母親の感情を推測することが出来るようになった」と表現しているところである。私が感性教育で目指しているのはまさにこのことに尽きると言ってもよいからである。

*

以上、3名の学部4年生の感性教育での体験談を紹介したが、いずれも人間としての自分がいかに変化したかを率直に述べていて、深い感動を禁じえない。彼ら自身の人格の成長をも感じさせる内容である。感性教育が従来の専門教育での知識の教授とは異なり、人格にまでも影響を及ぼすものであることがわかる。

これまでも感性教育は私にとって日頃の臨床での治療実践と本質的に同じものであることを実感してきたが、そのことを端的に示してくれた学生がいる。最後にそれを紹介しよう。

「異なる意見も視点を変えることで納得できる」

学部4年 男性

1年半ゼミをやっていく中で私は人を観察する力がついたと感じた。それは日常生活においても実感できる。

ゼミを始める前は自分と考えが合わない人の意見は聞かない、もしくは聞き流すことが多かった。例えば、アルバイトで客がクレームを入れたときにも、とりあえずあしらうくらいのことしかしなかった。しかしゼミでの活動を通して、一見自分が共感できない意見も視点を変えることで納得できるということを実感した。アルバイトで客がクレームを入れた時に、少し違った考えをするよう意識するようになった。その結果、客の表情が180度変わったという事が起こった。社会の中で様々な視点で物事を見るということの大切さを学んだ。

またゼミでは最初は自分の意見が正しいかどうかを考えすぎるあまり、自分の意見や考えがあまり出せないということが多かった。しかしゼミでの議論を積み重ねていくうちに、正解はたくさんあるということに気づかされた。その結果、今でも考えることは多いが、自分の意見を全く出せないということとはなくなった。

様々な視点から見る。議論では正解がたくさんあるということが1年半ゼミを通して大きく学んだことであると感じた。またゼミを進めていくうちに、これから社会人になっていくのだという意識が芽生えた。そして時間を意識しなくてはならないということもゼミを通して学んだことであった。

4月からは社会人になるが、これまでのゼミでの活動は将来必ず役に立つと思っている。これまで学んだことを社会人になるうえで大切にしていきたいと思う。

この1年半で大きな成長を見せた学生の一人である。当初は非常に警戒的な構えが強く、見るからに強い緊張を感じさせ、最

初の頃は遅刻が目立ち、少人数形式のゼミに参加することがとても苦痛であることが一目でわかる学生であった。正直なところ、最初に出会った時には最後までついていけるであろうかと心配であった。発達になんらかの問題を抱えているのではないかと危惧されるほどであったからである。

しかし、彼は途中からまったく遅刻をしなくなり、最後までゼミに参加し、次第に自発的に発言するようになった。

当初自分を守ろうとして、自分の考え方に執着していたというが、率直に思いを語り合うゼミを通して、同じ対象を観察しても人によってももの見方が異なることの発見と同時に、逆に一見同じように思えても、よくよく語り合うと見方が異なっているのだという発見を味わっている。自己中心的にしか人間観察ができなかった彼がゼミを通して、他者の心、他者の視点をも獲得し、多面的に物事をみることができるようになっている。

この体験談は彼の率直な思いがよく語られていて好感を抱かせるものである。感性教育が人間教育にも通じるものだという事を教えてくれているのではなかろうか。

冒頭で述べたように、後半に取り上げた学生たちは全員一般企業に就職が決まっている。臨床家を志すものは誰一人いない。しかし、彼らには皆自分自身の人間に対する見方に大きな変化が生まれ、多様なもの見方が身につけていることがわかる。それは彼らの人格の発達と成長を感じさせる内容で、近い将来社会人になった際に今回の体験はきっと生きてくることを期待させるものである。

*

今回、私がなぜ大学院生ではなく、学部

生の体験談を取り上げようと思いついたかを最後に述べて筆を擱くことにしよう。

日頃大学院で私が接している学生は全員臨床家を志している人たちである。感性教育は臨床家を志す人たちへの教育としてそれなりの期待を込めて実施しているものである。しかし、残念なことに、これまでの本学の大学院生相手の手応えは、ここで取り上げた学生たちほどではなかったというのが正直なところである。それはなぜだろうかと考えた時、私の脳裏に浮かんだのは、臨床家という専門職を目指しているという気負いや専門教育自体が彼らの率直な思いを吐露することを阻んでいるのではないかという懸念である。

これまでの経験に即して言えば、そこには自らに内在するアンビヴァレンスに触れるあるいは触れられることに対する恐れからくる心理的な防衛が少なからず関与しているのではないか。臨床家になろうと思うからには、ぜひともその壁を乗り越えて欲しい。なぜなら、そのような壁にぶち当たり、どうして良いか路頭に迷い、ついには心を病むに至っているのが、日頃私たちの出会うクライアントたちだからである。そんな彼らにきちんと対峙できる臨床家になるためには、自らのアンビヴァレンスに振り回されることなく、しっかりとそれに向き合い、乗り越えることが求められる。学部生の率直な体験談からぜひとも学んでほしい。

私は学部では社会福祉学科に、大学院では臨床心理学専攻に属している。本稿で取り上げた学部生の中に社会福祉士を目指している者がいるのはそのためである。ただ、臨床心理士や公認心理師であろうが、社会福祉士であろうが、対人援助職を目指

すことでは本質的に変わらない。いわんや一般企業に就職する学生でも感性教育を学ぶ喜びを語っているのは、感性教育が人間教育に通じるからではないか。学部生の感性教育での体験談はそのことをいみじくも暗示しているのはなかろうか。

謝辞 感性教育で率直な思いを語ってくれた学生たちに感謝の意を表したい。

文献

- 廣瀬たい子 (2018) 書評 小林隆児著『臨床家の感性を磨く—関係をみるということ—』．乳幼児医学・心理学研究、27(1), 55-56.
- 小林隆児 (2015) . あまのじゃくと精神療法—「甘え」理論と関係の病理—．弘文堂.
- 小林隆児 (2017a) . 臨床力を高めるための感性教育 (研究叢書No. 42) . 西南学院大学学術研究所.
- 小林隆児 (2017b) . 臨床家の感性を磨く—関係をみるということ—．誠信書房.
- 小林隆児 (2018a) . 常識common senseを疑い、共通感覚sensus communisを呼び醒ます—「感性教育」の目指すもの—．西南学院大学附属臨床心理センター—紀要, 創刊号, 2-7.
- 小林隆児 (2018b) . なぜ多くの学生が母子間のアンビヴァレントな情動の動きを感じ取ることができないか—「感性教育」の新たな試み—．西南学院大学人間科学論集, 14(1); 279-318.
- 小林隆児 (2019) . 大学新入生を対象としたアクティヴ・ラーニングとしての「感性教育」の試み．西南学院大学人

間科学論集, 14(2); 161-217.

小林隆児 (印刷中a) . アンビヴァレンス
という情動の動きは感じ取るしか術は
ない—拙著に対する廣瀬氏の書評を読
んで— . 乳幼児医学・心理学研究,
28(1).

小林隆児 (印刷中b) . なぜ「感性教育」
は大学生の人格発達を促進するのか.
西南学院大学人間科学論集, 15 (2) .

小林隆児 (印刷中c) . アクティブ・ラー
ニングとしての「感性教育」は大学生
にとってどのような学びの体験か. 西
南学院大学人間科学論集, 15 (2) .